



最優秀賞

設計部門



作品概要

作品名—— CO・MO・RE YOTSUYA(コモレ四谷) ランドスケープ計画
 所在地—— 東京都新宿区四谷1-6-1~5
 事業主—— 独立行政法人都市再生機構
 設計—— プロジェクトマネジメント/独立行政法人都市再生機構
 基本設計・デザインディレクション・工事監理:
 日本設計・三菱地所設計共同企業体
 実施設計: 大成建設一級建築士事務所
 設計協力—— 景観照明: シリウスライティングオフィス
 外構サイン: 乃村工芸社・ノムラプロダクツ
 施工者—— 大成建設
 設計期間—— 2014年9月~2016年8月
 施工期間—— 2016年9月~2020年7月
 規模—— 敷地面積 17,931.82㎡
 主要施設—— 広場、ゆるやかな丘、芝生、植栽、水景(流れ)、ベンチ、サイン、屋上緑化、壁面緑化 他

作品評

本作品は、土地の高度利用と都市機能の集積を目的とする東京都心の大規模市街地再開発事業での、複合用途建築物と一体化した緑豊かな空間づくりを目指したランドスケープ計画である。
 この事業では、商業・公益・教育・住宅施設で構成される四谷の多機能拠点づくりとともに、四谷駅周辺市街地の抱える賑わい交流の場づくり、防災機能の強化、良好な街並み形成、歴史遺産の継承等の様々な都市課題改善の役割が求められており、それだけにランドスケープの力量が大きく問われる業務であったといえる。
 応募者は、これらの計画課題に対して、建築と一体化したステップガーデンによる緑の丘の創出、防災拠点機能を有する開放的な広場の設置、街路の緑とつながる快適な歩行空間の創出などを提案・計画し、建築と緑が融合した秀逸なランドスケープ空間を実現している。
 また、提出資料についても、地域特性の把握からランドスケープコンセプトの設定、植栽計画、ディティールプランの流れが、文章・図面・写真の組み合わせでわかりやすく説明されており、こうしたプレゼンテーション力を含む総合力が高く評価され最優秀賞となった。

設計部門



①三栄通り側 ②歴史サインと水景 ③出迎いの広場と外堀通り側 ④出土した間知石をゲートに活用

CO・MO・RE YOTSUYA(コモレ四谷) ランドスケープ計画

株式会社三菱地所設計

津久井敦士・植田直樹・松尾教徳・西垣和真・多田裕樹(元社員)

株式会社日本設計

常盤純代

大成建設株式会社一級建築士事務所

山下剛史・小池 亘・神田祐樹

独立行政法人都市再生機構

大倉孝司・村尾 駿・森田修平

本計画は、四谷駅前初の超高層ビルを含む大規模再開発である。如何にしてこれを既存市街地と調和させるかが本事業の課題の一つであった。また、四谷の歴史、地域的特色からくる多様性を活かし、街の機能や人と結びつく緑豊かな空間の創出が求められたことを受け、計画地に由来するさまざまな特徴を丁寧に拾い上げ、場所に応じて性格の異なる空間を創出するランドスケープ計画とした。

—コモレビの広場

外濠の谷の「人によってつくられた地形」を手掛かりに、外堀通りから建物低層部へとつながるゆるやかな丘を設けた。こ

の連続性に配慮し、計画地の内外をつなぐ道は切通しとした。

中心には、新たな憩いの場となる天然芝の広場を設け、それを囲む植栽は、外濠の緑とのつながりを意識し、雑木が主体の「武蔵野の杜」とした。尾根に沿って常緑樹を配し、樹冠の連続性により丘の形を強調しつつ、林縁には落葉樹を多く配して彩ある緑の景観を生み出している。

建物低層部のステップガーデンは、平面緑化に加えて、パラペット先端に、じゃこ緑化による立体的な緑化を行い、外濠からコモレビの広場を経て建物低層部へとダイナミックに連続する緑の景を創出している。

—三栄通り側

江戸時代には玉川上水の樋管が埋設され、町人地の賑わいが

広がっていた記憶を継承し、直線の水路の設置、江戸園芸文化に触発された植栽や人の溜まりに配慮したベンチの配置など、歩きたくなる街路空間を創出した。

—外堀通り側

外堀通りの大きなユリノキの街路樹と呼応させるように風環境にも配慮した常緑樹のタブノキ並木を配置。迎賓館から続くビスタ景に呼応する品格ある歩行空間を創出。

—出迎いの広場

建物先端に空中庭園を設け、パサージュ(貫通路)の先に広がるコモレビの広場との繋がりを意識させる緑の顔出しを行った。